

# 古府しのまち遺跡発掘調査報告

1991年3月

石川県立埋蔵文化財センター



# 古府しのまち遺跡発掘調査報告

石川県立埋蔵文化財センター



## 例 言

1. 本書は県農林水産部の行なう水田農業確立排水対策事業河田地区に係わる埋蔵文化財（古府しのまち遺跡）調査報告書である。
2. 調査は県農林水産部耕地建設課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが平成元年度に実施した。（担当：北野博司）
3. 調査にあたっては小松土地改良事務所の協力を得た。
4. 出土品整理は平成2年度に(株)石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。
5. 本書の執筆は第2章を北野が、他を浜崎悟司が行った。
6. 本書で用いる方位はすべて座標北、水平基準は海拔高（m）である。
7. 出土品・記録資料は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。
8. 本書を執筆するにあたり、周辺の遺跡調査状況について小松市教育委員会（望月精司氏）に有益な教示を受けたほか、以下の文献を参照した。

石川県教育委員会文化財保護課

「小松市古府しのまち遺跡」1974年

石川県立埋蔵文化財センター

「高堂遺跡」第Ⅰ・Ⅱ次、第Ⅲ次発掘調査概報 1981、1982年

「漆町遺跡」Ⅰ・Ⅱ 1986・1987年

「佐々木ノテウラ遺跡」1986年

「小松市古府遺跡」1987年

「吉竹遺跡」1987年

「白江梯川遺跡」1988年

「浄水寺墨書資料集」1989年

小松市教育委員会

「第一小学校校地内漆町遺跡発掘調査報告書」1987年

「後山無常堂古墳・後山明神3号墳発掘調査報告書」1989年

# 目 次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	4
第3章 調査の結果	6
第1節 調査区	6
第2節 遺構	6
第3節 遺物	8
第4章 まとめ	12

## 図版目次

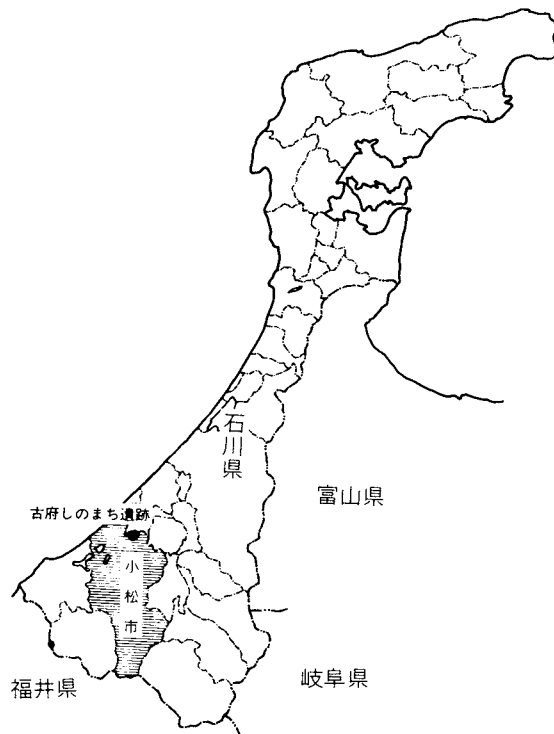
図版一 遺跡
(1) 調査着手時の状況
(2) 作業状況
図版二 遺跡
(1) 調査区全景
(2) 調査区西部
図版三 遺跡
(1) 大溝S X-1
(2) 建物跡S B-1
図版四 遺物
図版五 遺物
図版六 遺物

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 調査箇所と周辺の遺跡	3
第3図 調査区の位置	5
第4図 調査区遺構図	7
第5図 出土遺物実測図1	9
第6図 出土遺物実測図2	10
第7図 出土遺物実測図3	11

# 第1章 位置と環境

古府しのまち遺跡は、石川県南西部に位置する県内第2位の都市小松市の北東端近く、古府町集落の北西にひろがる遺跡である。遺跡は、辰口町南部の丘陵地帯に源を発した鍋谷川がその流路を西から南へ90° 変える内角部分に位置している。鍋谷川は、小松市北部を流れる県内第2位の河川梯川の支流の一つである。手取川扇状地の南の扇端部にあたる寺井町南東部及び能美丘陵北部地域の地表水を集めながら平野部を進み、小松市千代町と佐々木町集落の間で本流に注いでいる。遺跡は海岸の河口から梯川・鍋谷川を8 km余り遡った地点に所在しているが、あたりは標高4 mをきる低地であり、まとまった降雨があれば一面に冠水することもしばしばである。西方に向かっては、海岸の砂丘にいたるまでの間を梯川系の河川運搬物が埋積した、概して起伏に乏しい低平な平野がひろがる。一方、遺跡の東方は、標高15m前後の洪積台地である



第1図 遺跡の位置

通称古府台地を介して背後には能美丘陵が控える。梯川の中・下流部においては、平常は流れが遅緩であるところから、米・炭・石材などの物資を運び出すための舟が昭和初期には河口から10km余り上流の中海町付近まで遡上していたと伝えられ、古来梯川が交通の幹線としての側面をもっていたことも当地域の歴史を考えるうえで看過されてはならないであろう。

さて、当地周辺における縄文時代の遺跡としては、鍋谷川北岸にあたる寺井町牛島ウハン遺跡縁辺で前期の、古府台地上の南野台遺跡・鍋谷川沿いの横地遺跡でそれぞれ中期・後期の遺物の出土が伝えられ、千代町地内で晩期～弥生時代初頭にかけての遺物が検出されているが、これら縄文時代以前の状況については遺物の散発的な出土にとどまっている部分が大きく、今後の調査の進展によってより明らかにされていくものと見られる。弥生時代中期の遺跡は、梯川下流域で検出されている。八日市地方・梯川鉄橋・白江梯川あるいは吉竹・高堂等発掘調査された大半の遺跡で、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺構・遺物が大量に見つかっている。これらの遺跡はここ10数年来調査されたもので、その成果は整理途上のものが多いが、漆町遺跡から見つかった大

弥生時代も終わりに近い頃、本遺跡西方には数多くの集落が成立していたものと見られる。梯川中流域の漆町・念仏寺塔・千代・白江梯川あるいは吉竹・高堂等発掘調査された大半の遺跡で、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての遺構・遺物が大量に見つかっている。これらの遺跡はここ10数年来調査されたもので、その成果は整理途上のものが多いが、漆町遺跡から見つかった大

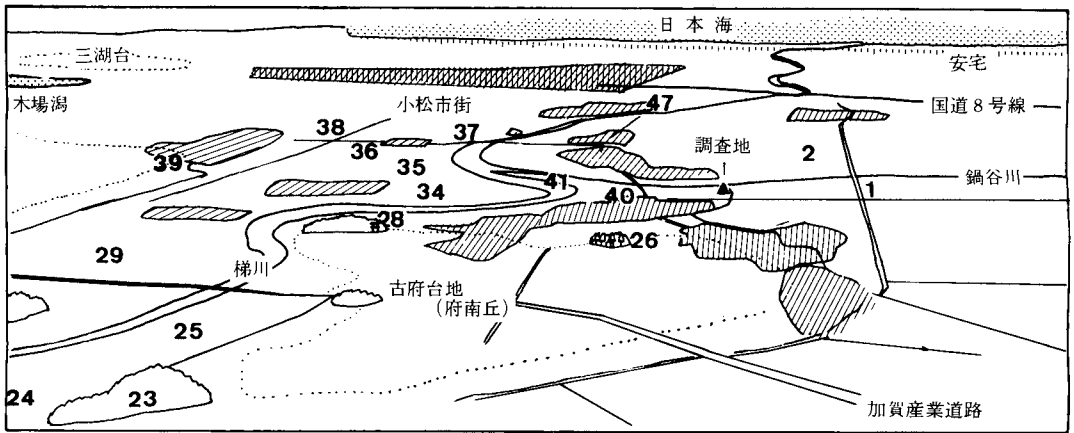
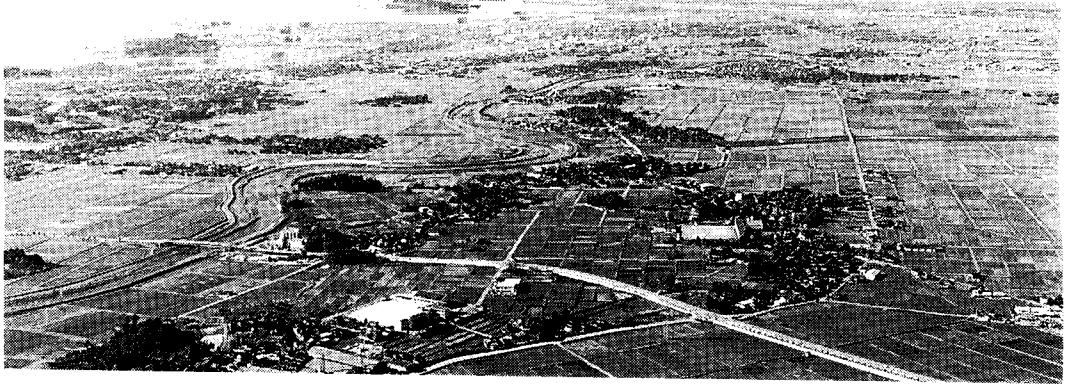
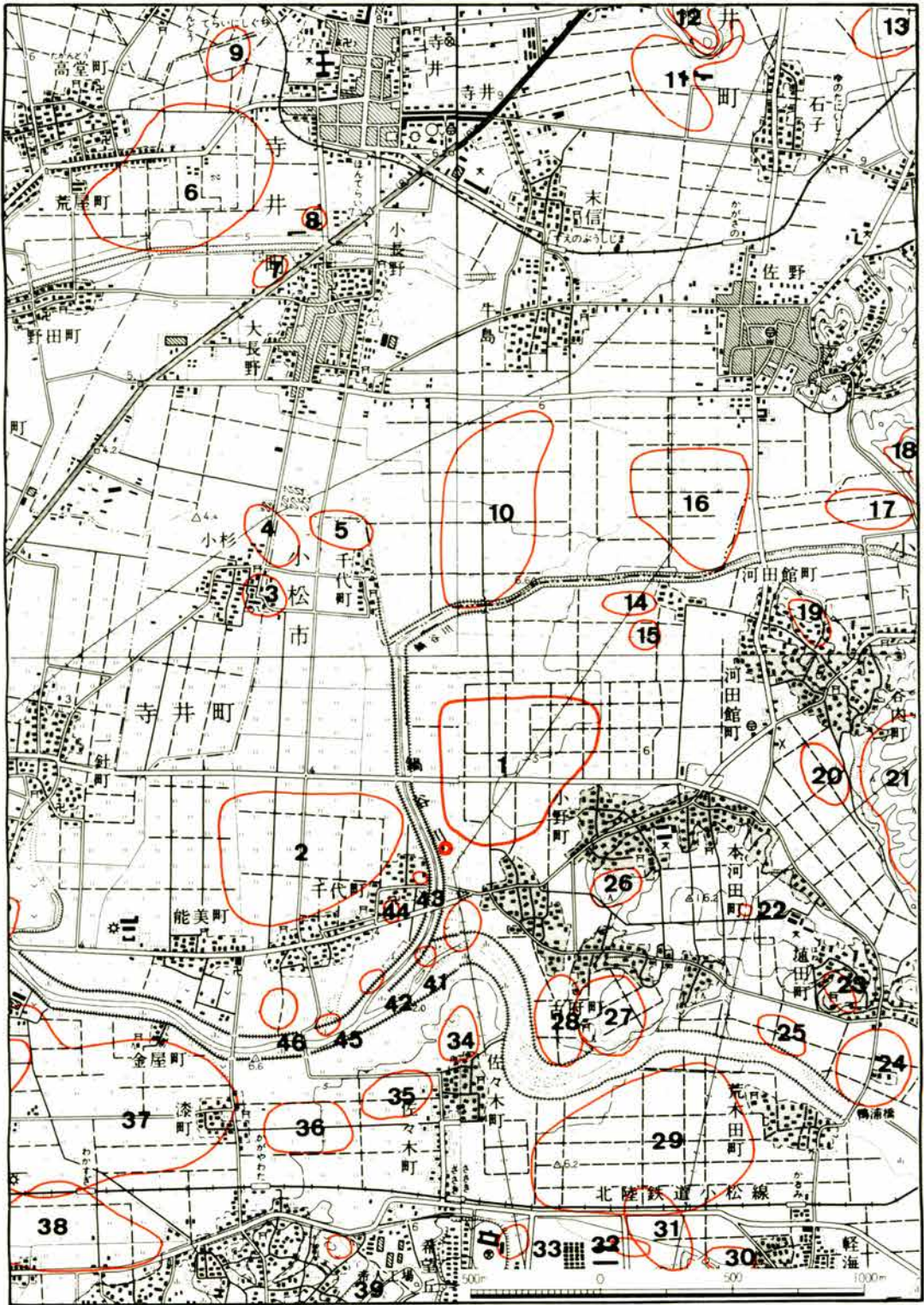


写真1 梯川中流全域遠景(国府台上空より・平成2年12月撮影)

- |                     |                   |                     |
|---------------------|-------------------|---------------------|
| 1. 古府しのまち(弥生～古墳、平安) | 18. 向山古墳群         | 34. 佐々木アサバタケ(弥生～中世) |
| 2. 千代オオキダ(古墳～中世)    | 19. 河田館跡(縄文～中世)   | 35. 佐々木ノテウラ(弥生～中世)  |
| 3. 千代デジロB(縄文～中世)    | 20. 河田C           | 36. 佐々木(平安)         |
| 4. 千代デジロA(縄文～中世)    | 21. 河田山古墳群        | 37. 漆町(弥生～中世)       |
| 5. 千代デジロC(縄文～中世)    | 22. 前田利常公灰塚       | 38. 打越(古墳～中世)       |
| 6. 高堂(弥生～中世)        | 23. 宮谷寺屋敷(縄文、室町)  | 39. 八幡古墳群           |
| 7. 大長野(平安)          | 24. 埴田(奈良～平安)     | 40. 古府(平安～中世)       |
| 8. 小長野              | 25. 埴田ウラムキ(古墳～中世) | 41. フンド(平安)         |
| 9. 高堂四方堂(古墳)        | 26. 十九堂山(平安、中世)   | 42. 横地(縄文)          |
| 10. 牛島ウハシ(古墳、奈良～平安) | 27. 南野台(縄文、古墳)    | 43. 小野町(古墳)         |
| 11. 和田山下(縄文、古墳)     | 28. 古府シマ(中世)      | 44. 千代城跡(室町)        |
| 12. 和田山古墳群          | 29. 荒木田(古墳、平安～中世) | 45. 本村(古墳)          |
| 13. 秋常(平安)          | 30. 西芳寺跡(縄文～中世)   | 46. 千代マエダ(古墳、平安)    |
| 14. 15. 下出地割        | 31. 軽海中世墓群        | 47. 白江梯川(弥生～中世)     |
| 16. 佐野八反田(奈良～平安)    | 32. 亀山玉造(古墳)      |                     |
| 17. 河田向山下(縄文、平安)    | 33. 大谷口(弥生)       |                     |

量の土器群をもとに提唱された「白江式」土器が北陸における当該期の土器編年の枠組みを構成する上で大いに注目を集めたのを初め、豊富な内容は集落の実体を明らかにするうえで貴重な資料を提供するものと期待されている。これらの遺跡群は古墳時代前期にかけて降盛期を迎え、周辺部の古墳群の造営にかかわっていったものとみられるが、6世紀以降急激にその規模を減じ、9世紀にいたるまで全体に低調な状況が続く。この状況は洪水と長期的な滞水状態を想定させるものであるが、その検証は未だ十分ではない。またその間の集落の動向も明らかでないが、漆町遺





第2図 調査箇所(○)と周辺の遺跡 (1/2500)

跡の一部と佐々木ノテウラ遺跡等に時期的な空白を部分的に埋める資料がある。

9世紀後半以降、本遺跡周辺では遺跡の数が再び増加する。発掘調査の行われたものでは、しのまち遺跡南方の古府遺跡・梯川対岸の佐々木ノテウラ遺跡があり、漆町遺跡でも該期以降再び隆盛に向かったことが知られている。10世紀にはいると、当地周辺はさらに活況を呈する。特に、寺院関係の遺跡が目立ち、十九堂山遺跡（廃寺）・軽海廃寺が営まれたのはこのころと見られる。また、発掘調査によって大規模な遺構と多彩な遺物が発見された小松市八幡町浄水寺跡についてもこのころに堂宇の造営が本格化したものと考えられている。なお、10世紀には加賀国府は能美郡に置かれていたとされ、古府町旧国府地区はその有力な比定地でもある。

11世紀代に属する遺構・遺物は当地周辺では現状では少ないようである。

平安時代末～鎌倉時代には漆町遺跡で多くの遺構が検出されているのをはじめ、白江梯川遺跡での集落の再興が顕著になるなど、梯川中～下流域における再開発が進行していったものと見られる。このころの加賀国府は旧国府地区にあったものとして特に異論を見ない。本遺跡はその眼前に位置している。

## 第2章 調査に至る経緯と経過

過去の調査 古府しのまち遺跡の発掘調査は、過去に二度実施されている。第一は、昭和48年度に県営は場整備事業小松東部地区に係わり、今回の調査区の北約300mの地点（第3図）で行われたもので、9c末～10c初の良い土師器一括資料を出土している（石川県教委1974）。第二は、昭和63年度に小松市教育委員会が団体営土地改良総合整備事業に関連して行ったもので、本調査区の南側約360㎡を発掘し、古墳時代前期～平安時代の遺構・遺物を確認している。しかし、今回の調査を含めこれまでの調査はいずれも小規模なもので、その実態についてはほとんど明らかにされておらず、詳細は今後の調査に委ねられている。

今回の調査の経緯と経過 本調査は、県農林水産部による水田農業確立排水対策事業河田地区に係わるもので、同耕地建設課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施した。平成元年10月23日に分布調査により旧耕土下に若干の遺物包含層が確認され、協議の結果、立会調査として対応することとなり、同年11月20日～24日（実働4日）にかけて現地調査を行った。調査は、河田排水機場前面の遊水地部分を対象とし、約150㎡を発掘した。約1mの盛り土を重機で除去した後、薄い包含層を人力で掘り下げ遺構検出したが、遺物の出土は希薄であった。遺物の大半は西半部北側の大溝から出土したもので、発掘作業も同遺構の調査が中心であった。

遺物整理（記名・分類・接合、実測、トレース）は平成2年度に（社）石川県埋蔵文化財保存協会に委託して行った。

### 発掘調査作業員名簿（順不同）

北村勇敢、北村常則、宮岡常雄、田中柳子、広島キヨ子  
坂田和子、南 政枝、北 秀雄、中 芳、藤田美和子



第3図 調査区の位置（昭和48年は場整備前の図に加筆）

## 第3章 調査の結果

### 第1節 調査区

今回調査を実施した箇所は、小野川が鍋谷川へ合流する直前の地点の南岸、現在は河田排水機場東側の遊水池の南半部分に当たるところである。調査区は小野川の流路方向に沿った長さ32m、幅5mの細長い区画となる。調査前の標高は3.5m程度で、農道を隔てた東方の水田面より約0.2m低いが畑地として利用されていた部分である。

遺構は耕作土以下20～30cm程度の堆積土を除去した、明黄褐色土上面において検出される。遺構検出面の標高は3.3m前後を測り、小野川に向かって若干低くなる傾向にある。また、後述の大溝より北西側においては、大溝の上層埋積土が検出面の低下した分を埋めるように堆積した状況が看取された。

### 第2節 遺構

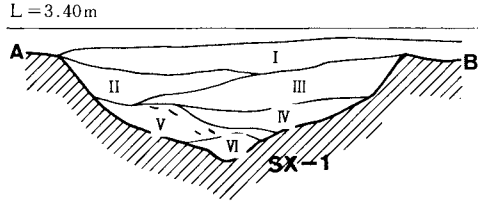
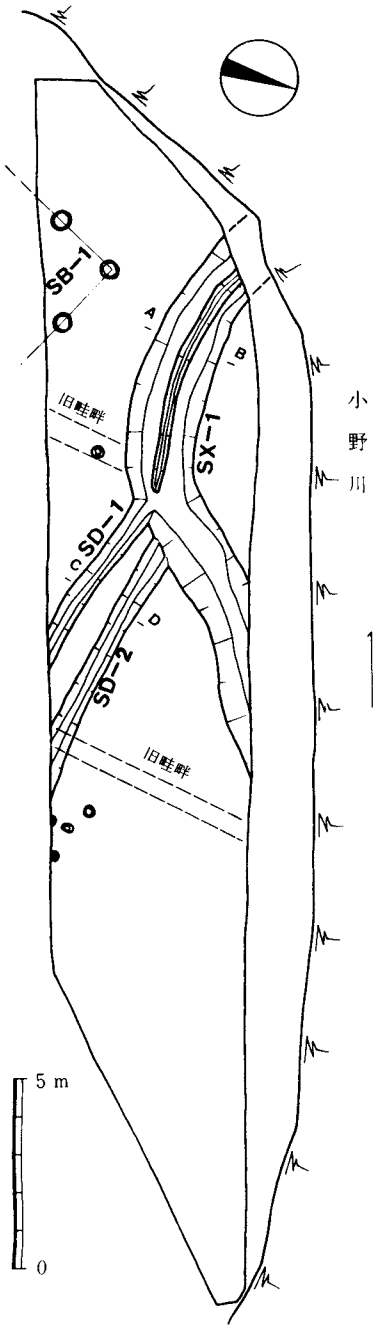
調査において検出された遺構は、建物跡1・溝3・小穴若干等である。

建物跡SB-1は、調査区下流側で検出された3つの柱穴から存在を推定するものである。柱穴は直径45～50cmの円形堀形をもつもので、検出面からの深さは30cmを測る。柱穴間の距離は中心で1.8mを測る。軸線方位はN29°E付近を指す。

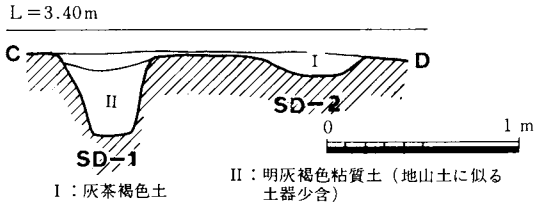
溝SD-1・SD-2は調査区中央をとともに東西方向に直線的に走るものであるが、西端は大溝と平面的に重なり合う。大溝との切り合い関係は現地では明らかにできなかったが、出土遺物の状況からSD-1・2が後出と考えられる。SD-1は幅0.5m、深さ40cmを測る断面逆台形のものである。軸線方位は70°W付近を指す。SD-2は幅0.5～0.7m、深さ10mを測る。断面は皿状で、埋土はSD-1上層埋土と同様である。軸線方位はN75°W付近を指す。SD-1・2からは、その検出時を中心に奈良時代頃の、またSD-1下層からは古墳時代後期の遺物が出土している。

大溝SX-1は幅1.5～1.9mを測る本調査区最大の遺構である。SD-1・2との交差部で屈曲し、北東及び西へ伸びる。椀形の断面を呈し、検出面からの深さは東部で25～30cm、西端では40cm以上を測る。また、SD-1との交差部以西では溝底にさらに幅0.3m、深さ20cmの細溝が認められる。粘質土系の埋土を有し、その中～上位ではベース層の土塊の混入が認められる。また、中～下位においては多量の古墳時代初頭頃の遺物を含んでいる。

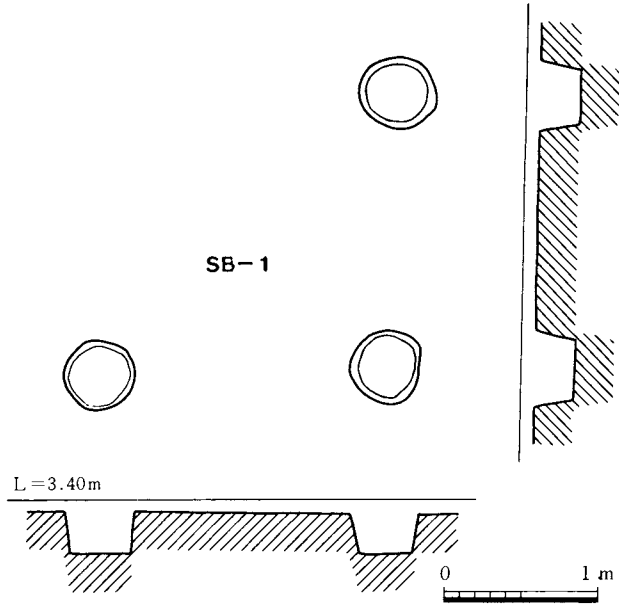
その他、調査区内からは直径20～30cm程度の性格不詳の小穴5ヶ、及び調査以前にかかる畦畔の痕跡を検出している。



- I : 灰茶褐色粘質土 (包含層)
- II : " (地山土混・炭化物多混)
- III : 明黄褐色地山質土 (灰褐色土少混)
- IV : 黄灰褐色粘質土 (地山土混・土器少含・炭化物少混)
- V : 灰褐色粘質土 (土器片大多含・炭化物多混)
- VI : 暗灰褐色土 (土器片大少含・炭化物多混)



- I : 灰茶褐色土
- II : 明灰褐色粘質土 (地山土に似る土器少含)



第4図 調査区遺構図

### 第3節 遺物

今回の調査では、収納ケース（37\*59\*13cm）に5箱程度の遺物の出土があった。鉄釘片と緑色凝灰岩片各1点の他は、すべて土器類が占める。出土地別にみると、大溝SX-1から出土した土器類が多く、全量の4/5強はここから出土している。次いでSD-1・2及びその周辺から出土したものであり、その他の柱穴あるいは包含層から出土したものは極少量にとどまる。土師質のものではやや粉っぽい胎土を有した、明るい灰茶色を呈するものが多数を占める。須恵器は、産地の推定できるものはすべて小松南部産と見られる。土器の遺存状態は極めて悪く、特に土師質のものは元来の器表をとどめないまでに剝落して胎土内の砂粒の浮き出ているものが多い。従って、図示した内容についても器面の調整が判然としないものが多いほか、端部の認定や屈曲部の器形、あるいは器厚について若干の変動も予想される。以下、出土地点別に述べる。

SB-1 出土遺物 西端の柱穴埋土から土師質の土器細片が出土している。時期は不明。

SD-1 出土遺物 埋土下層より、6世紀初頭～同中葉頃とみられる須恵器（2・58）、上層から奈良時代のもつとみられる須恵器（3・4）を検出している。2は坏身でやや深目の器形をもつものと推定される。受け部はしっかりとしたもので、口縁部は高く立ち上がり端部を丸く収める。外面に降灰が認められる。小片からではあるが、口径13.5cm程度に復原される。この資料はSD-2出土分との間に接合関係が認められた。58は天井部の2/3以上の範囲に回転ヘラ削りを施す坏蓋である。4は須恵器甕で強く張った体部から外反して開く口縁部をもつ。端部は軽く外方に引きだされ、上端に広い面をつくる。体部内面は同心円状の当て具痕、外面は縦方向の平行タタキメのちカキメ。

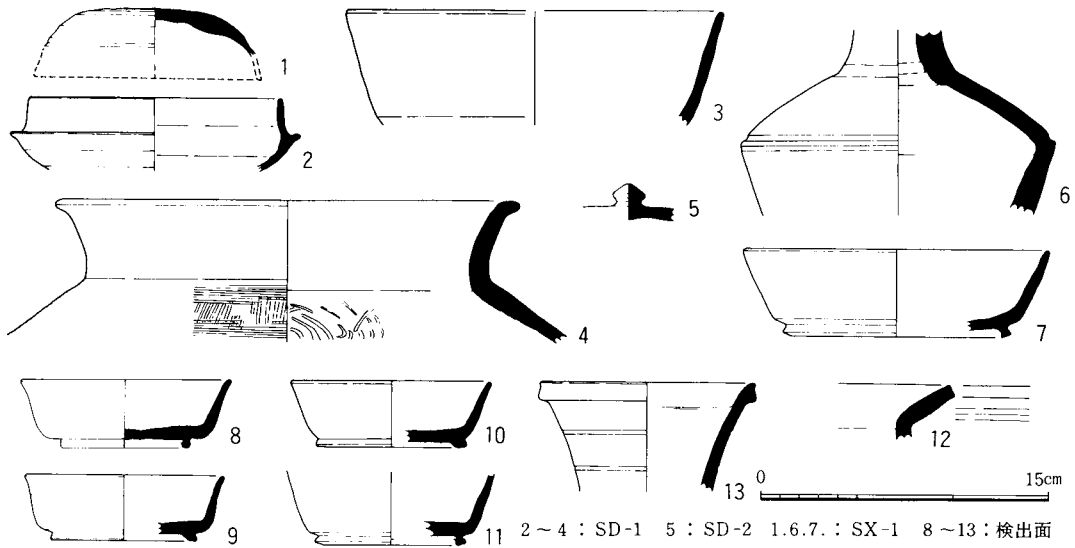
その他、SD-1からは少量の土師器片も出土している。

SD-2 出土遺物 5は須恵器坏蓋で、宝鉢形つまみがつく。他にSD-2からは、若干の須恵器・土師器片が出土している。

検出面出土遺物 遺構検出に際して、SD-1・2の上面に当たる箇所から（一部はSX-1にかかって）、奈良時代の須恵器（7～12）・土師器を採集している。これらの遺物は元来SD-1（上層）あるいはSD-2埋土に含まれていたものと考えられる。7～11は高台付きの坏で7が口径15.7cm・器高4.6cmと推定されるほかは、口径10.5～11.4cm・器高3.5～4.4cm程度に復原されるものである。なお11の外底面には回転ヘラ削り痕を認めることができる。12は甕の口縁部である。13は同様に検出された須恵器瓶の口縁部で、今回の調査で出土したもののうちもっとも新しく、10世紀以降のものであろう。

SX-1 出土遺物 SX-1においては、遺物の取り上げを上層・下層・最下層の3段階に分けて行っている。第4図右上に示した土層図におけるⅠ・Ⅱ・Ⅲ層が上層に、Ⅳ・Ⅴ層が下層に、そしてⅥ層が最下層に相当する。さらに、調査時に設定した土層観察畔により平面的にSX-1を3分割し、A-B以西を「SX-1・W」、SD-2との合流点以东を「SX-1・E」、両者の間を「SX-1・中央」と呼んでいる。遺物整理の結果、弥生時代終末～古墳時代前期に属するものが多数を占めるものの、「SX-1・中央」の上・下層及び「SX-1・E」の上層におい





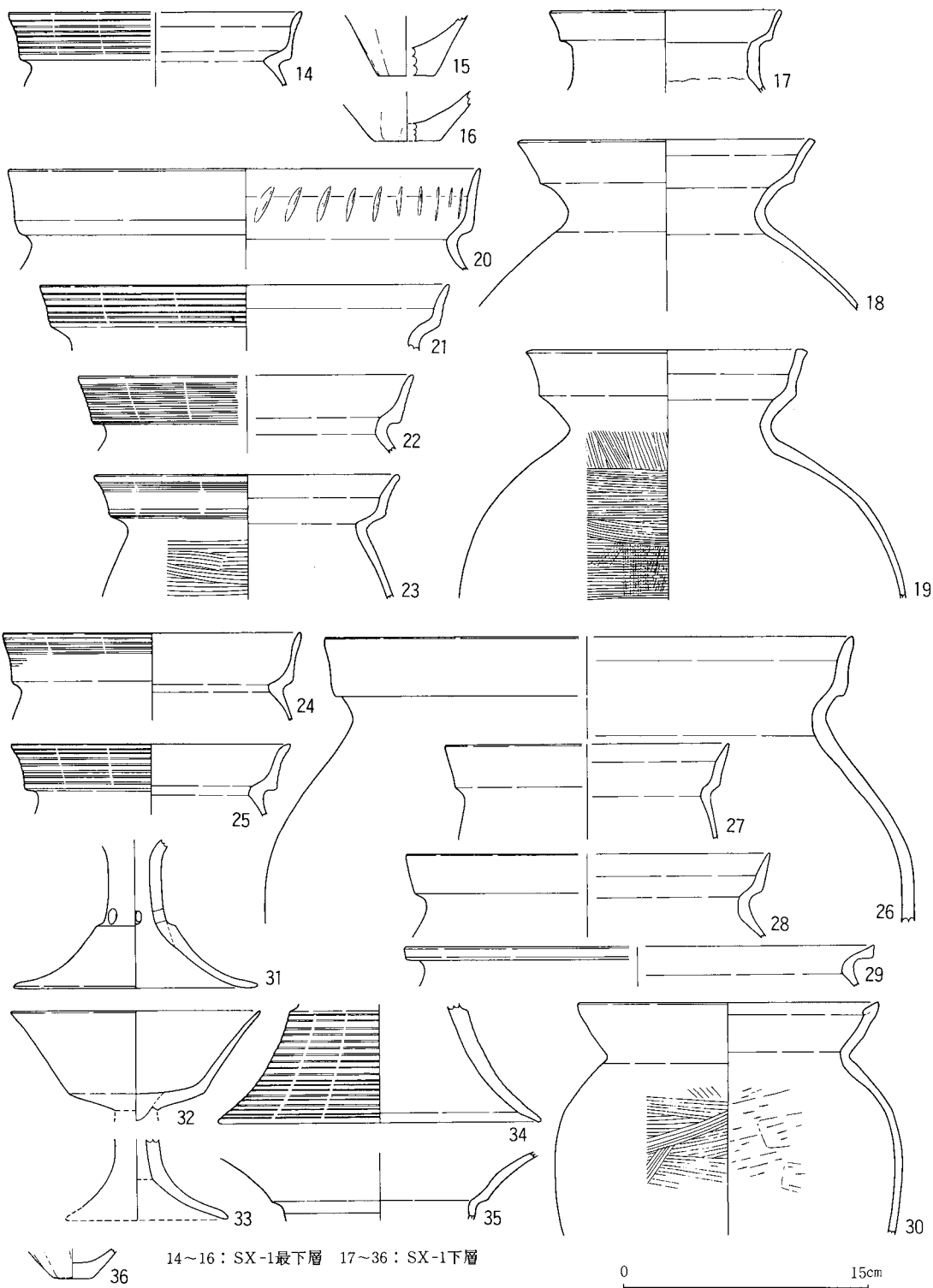
第5図 出土遺物実測図1

て古墳時代後期～奈良時代の遺物を含むことがしられた。これは、SD-1・2の掘り込みが、SX-1の埋土を切り込んでいたためであろうと解釈している。以下、取り上げの層位に従って記述する。

最下層：14は擬凹線文をもつ有段口縁甕、15・16は底部である。15は立ち上がりの急なスマートな器形が予想されるもので、古相を呈するものとみられる。

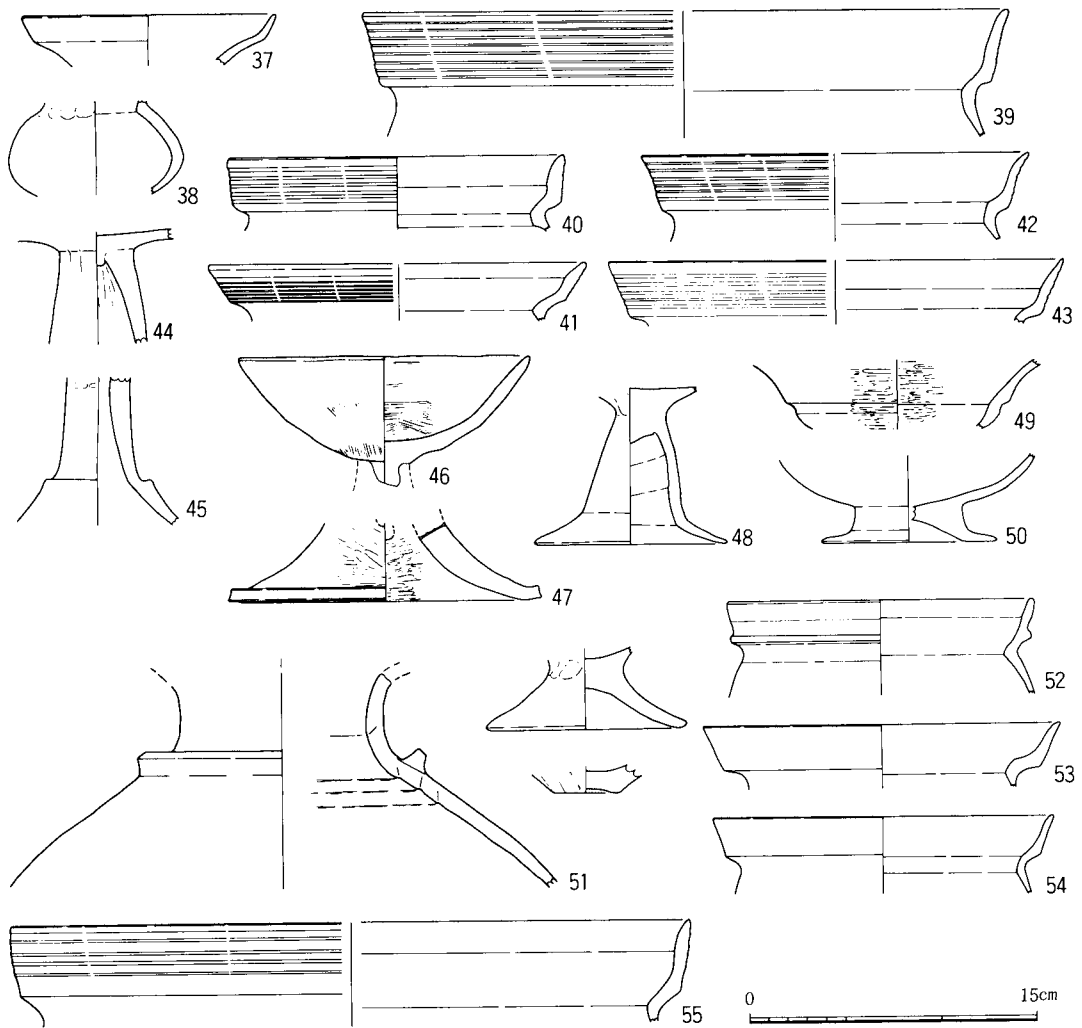
下層：17・19は壺である。17は直立した頸部に有段口縁のつくもの。18・19は口縁部下端を突出させる「山陰系」壺形土器である。口縁部を外反させるものと直立に近いものがあるが、いずれも端部を面取っている。20～28は有段口縁甕である。20・23・24・26～28においては、口縁部外面の擬凹線の有無あるいは条数について不確定である。30は布留形甕の系列上にあるもので、内面に大きく肥厚した端部は上面を押さえられ内斜する平坦面をなす。31～33は高坏。31は脚部で、裾部と脚柱部の境は段をなす。断口から両者の接合面が観察される。段直上に3方より円孔を穿つものである。32は坏部で、狭い受け部とわずかに外反気味に長く伸びる口縁部からなる。33は小型の脚部である。透孔の認められないもので、器体のわりに器壁が厚くぼったりとした感を受ける。34は器台の裾部で、脚柱部との境は段をなし「ハ」の字状に外反して開くものである。外面を擬凹線文が覆い、所々に赤彩の痕跡が認められる。35は外反して大きく開く口縁部をもつ鉢である。口縁部下は強くヨコナゲされ、明瞭な稜線をつくる。59は残存最大長7.5cmを測る緑色凝灰岩片である。打ち欠きの結果三角錐に近い形を呈しており、その底面に当たる一面は原面をとどめる。重量132gを測る。

上層：37は受口状口縁をもつ壺形土器である。38は小型壺で最大径が体部中位よりやや下にある玉葱状の器体をもつ。39～43は口縁部に擬凹線文を施す有段口縁甕である。40のように口縁部が短く直立するもの、42のように口縁部が長く、大きく外反するもの等を含んでいる。44～48は高坏・器台類である。46は、浅い碗形の坏部で受け部内面に荒いハケメ、外面にオサエ痕あるいはハケメをとどめ、器壁が厚いこととも相俟って、全体に鈍重な感を与える。脚部においては、柱



第6図 出土遺物実測図2





第7図 出土遺物実測図3

状部内面にシボリメの認められる44、棒状具による回転痕を残す48があり、裾部の形状においても、45は段・47は外反し端部を面取るのに対し、48では、中膨れした柱状部から屈折して開くものとなっている。なお、46・48は「SX-1・E」出土資料であり、混入品である可能性もある。層位不明の資料：51は頸部が直立して立ち上がる壺で、残存部上端で縁部にヨコナデを施した擬口縁を形成する。頸部直下に断面逆台形の高い突帯を巡らせる。二重口縁をもつものと推定される。外面の器表面の残存部にはわずかに赤彩痕を認めることができる。53～55は有段口縁甕、52は口縁部下端を突出させる「山陰系」甕である。

その他：1は須恵器坏蓋で天井部の2/3以上の範囲に回転ヘラ削りを施す。口縁部との境目の稜は器面が丸く隆起する程度である。6は長頸瓶である。肩部で屈折する器形のもので、頸部との接合は三段成形による。1・6についてはSD-1・2からの混入品と考えられる。

SX-1から出土した遺物の概略は以上のようなものであるが、若干の混入と見られる資料を除いてもこれらは当地におけるの土器編年上の法仏式から高島式にいたる長期間のものを含んでいる。

また、出土地点・層位で分けた各土器群についてみても、資料数が限られる最下層出土分については一応留保されるものの、下層対上層あるいは地点をそれに絡めた形においても時間上の細別を認めることは困難であろう。

## 第4章 まとめ

今回の調査では、わずかな面積にもかかわらず当地周辺の歴史を考えるうえで若干の寄与をなす成果があったといえる。

一点目は大溝とした溝状遺構の検出である。一般に弥生時代後半の掘削にかかる溝状遺構が検出された場合、その性格として周溝墓の周溝・水田の用排水路・集落を取り巻く環濠等と考えられることが多いであろう。大溝SX-1の場合はどうであろうか。今回の調査区の様な小面積の場合にはその性格付けに困難を伴うのがむしろ常とあるといえる。そこで、周辺の遺跡の状況によりながら少しだけ検討を加えてみる。

第1章で述べたように、梯川中流域においては弥生時代末に飛躍的な遺跡数の増加を見る。今後下層から前代の集落が発見されることがあっても、この傾向は変わらないものと見られる。これらの遺跡群での遺物の出土状況を見ると、やはり大小の溝状遺構から出土している場合の多いことに気付く。溝自体の機能については、漆町遺跡金屋サンバンワリ地区33・34号溝などについて指摘されたように、堰水の排水と想定されるものが一般的であろう。今回検出の大溝SX-1についても、規模・埋土の状況は上記のものときほど差はなく、調査区南方に接する地点で同時期の土坑・ピットなどの検出があること（昭和63年度小松市教委調査）からも、集落内あるいは縁辺にあって増水時には排水路として機能したものと考えることに特に支障はないようにみえる。もちろん、周溝墓・水田が隣接して営まれた可能性があろうし、溝が大規模な場合環濠的な意味合いを強めるものと思われるが、このころの集落の景観を考えるうえで一つのパターンを想定することが可能となってこよう。

二点目として、少ないながらも6～8世紀に属する遺物の検出をみたことが挙げられる。これは梯川中流域において遺跡数・規模が減少する時期にあたる。該期に特定できる顕著な遺構が本遺跡では未発見であり、過大評価は慎まねばならないが、8世紀の遺物については調査区の南西400mにおける古府遺跡に調査の際にも一定量が認められていることから注目できる。今後の周辺部における調査の進展により、様相が明らかになることを期待したい。

最後になるが、今回の調査結果は昭和48年に行われた一回目の調査の結果得られた古府しのまち遺跡のイメージと異なっている。梯川流域に多い「弥生～古墳時代+後世」の複合遺跡といった範疇に一応は分類されるが、今後とも遺跡の範囲と性格を時期毎にとらえる地道な作業が要請されよう。集落遺跡の範囲の推定には様々な困難が伴うことが予想されるが、検討の結果に基づき必要性・有効性に応じて別名称を符すことも考えられねばならないであろう。



(1) 調査着手時の状況



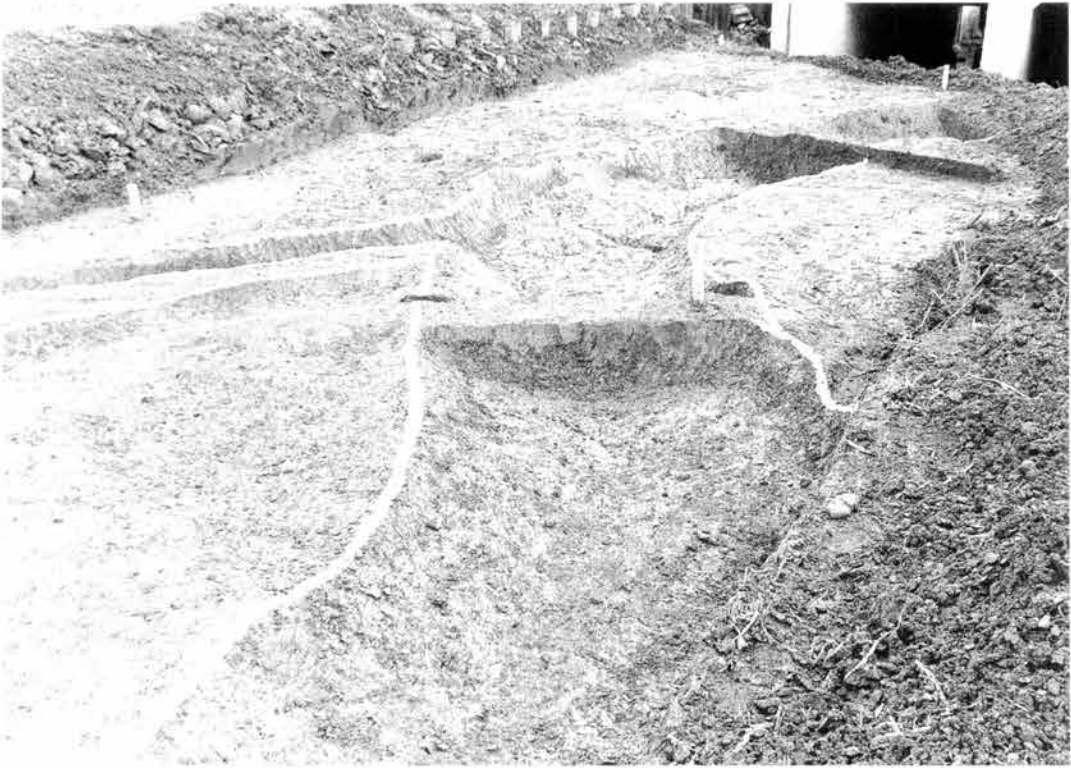
(2) 作業状況



(1) 調査区全景(西から)



(2) 調査区西部



(1) 大溝 SX-1

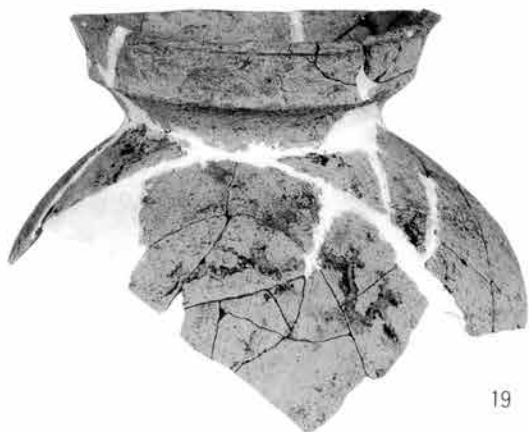


(2) 建物跡 SB-1

図版四  
遺物



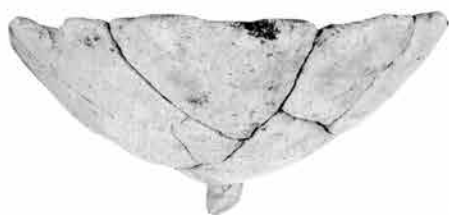
18



19



32



46



31



48



38



56





24



21



14



20



22



23



40



41



42



37



39



43



49



58



1



2

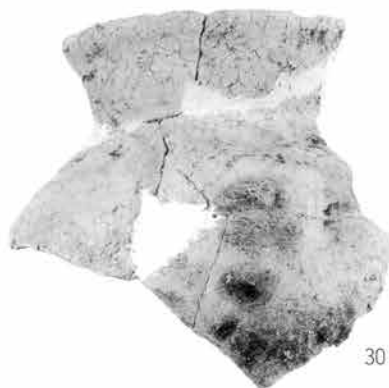


59

図版六  
遺物



17



30



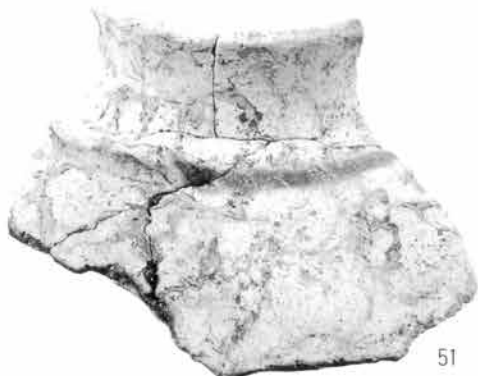
34



35



44



51



47



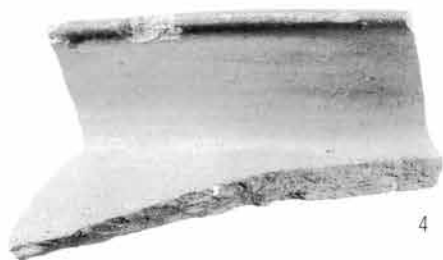
10



9



8



4



13



## 古府しのまち遺跡

---

---

1991年3月20日 印刷  
1991年3月31日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター  
石川県金沢市米泉4丁目133番地  
〒921 電話(0762)34-7692(番代)

印刷 北國書籍印刷株式会社  
石川県金沢市香林坊2丁目5-1

---

---